

## 第三章 調査記録

## 函谷鉾保存会保有文書の調査について

奥田 以在

史料の所在する函谷鉾町は、京都市下京区四条通烏丸西入に所在する両側町である。江戸期は仲九町組、明治二年（一八六九）の町組改正で下京九番組、明治五年（一八七二）・第二二区、明治二十五年（一八九二）・第一一学区（成徳学区）に編成されている。

また、同町は、中世から祇園祭に鉾を出している鉾町である。天明八年（一七八八）の大火で焼失したものの、天保十年（一八三九）に復興し、現在に至るまで鉾を維持継承している。

今回の史料調査では、この函谷鉾を維持・管理している公益財団法人函谷鉾保存会が保有している古文書および物品について、目録の作成と写真撮影を行っている。



函谷鉾町の史料は、昭和四十二年（一九六七）頃に京都市史編さん所によって調査され、江戸期から明治中頃までの紙焼きが京都市歴史資料館で閲覧可能になっている。しかし、今回の調査で蔵から出てきた史料の多くは、未発掘のものであった。時期としては、江戸後期から高度経済成長期までであり、かなり長期間にまたがる史料群



である。

京都の町文書は、前述の通り京都市史編さん所によってすでに調査されている。しかし、その時には明治三十年（一八九七）の共同組合設置がひとつの区切りとされ、それ以降の史料はほとんど撮影されなかった。そのため、明治中期以降の史料はまだ未発掘の状態であり、明治中期以降の町の研究は、京都の都市史研究における大きな課題となっている。このような状況のもとで発見された今回の史料は、近代の町の実態を明らかにする上で非常に貴重なものである。

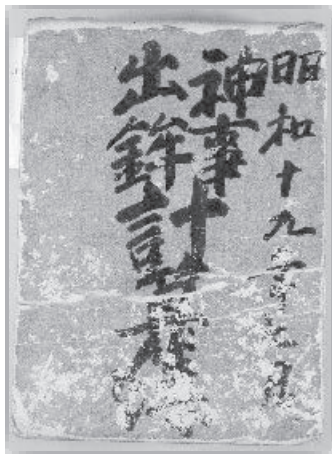
発見された史料は一二箱分である。調査中のため総点数を明記できないものの、全体の四分の一程度の目録作成を終え、採録数は約五〇〇点に及んでいる。

## 祇園祭関係

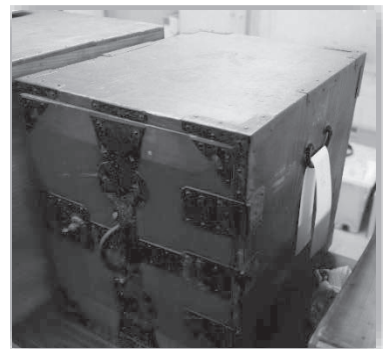
この中で興味深い史料のひとつが、祇園祭関係の史料である。今回発見された史料の中には、「神事勘定帳」が二冊残されており、ひとつは弘化三年（一八四六）から元治元年（一八六四）、もうひとつは慶応元年（一八六五）から明治十九年（一八八六）のものである。幕末維新时期を挟んで四〇年以上に及ぶ連続した記録となっている。この

期間は、山鉾町の財政を支えていた寄町制度が廃止されたり、清々講社が発足したりするという大きな変化のあった時期である。近世から近代移行期という変化の激しい時期の祇園祭運営を検討する上で、この「神事勘定帳」は非常に重要な史料である。

加えて、第二次世界大戦前後の神事の様子も、昭和十九年（一九四四）七月「神事出鉾計算簿」から伺える。山鉾巡行は、昭和十八年（一九四三）から昭和二十二年（一九四七）に長刀鉾と月鉾が巡行を再開するまで中止された。その様子は、「戦争が激化し、臨戦体制が強化されるなかで祇園



祭は大きな転換点をむかえた。昭和十八年（一九四三）には、山鉾は建てず、神幸祭のみ奉仕することになったが、昭和十九年（一九四四）にいたると、祇園祭は山鉾巡行はもとより神幸祭も中止された」と伝えられる一方で、



それ以外の神事の様子はほとんど明らかにされなかったため、あたかも祇園祭全体が中止されたように捉えられてきたきらいがある（祇園祭編纂委員会・祇園祭山鉾連合会 一九七六 三〇頁）。しかし、実際には、六角町のように神職を招いて祈祷を受けている町が存在し、神事としての祇園祭が可能な限り執り行われていたことが明らかにされつつある（奥田二〇二〇）。今回発見された昭和十九年七月の「神事出鉾計算簿」によれば、函谷鉾町においても、昭和十九年に囃子方への祝儀、八坂神社への扇子料や初穂料、粽三〇〇把の代金などが出金されており、可能な限り神事としての祇園祭を維持しようとしていた様子が伺える。

また、戦後の昭和二十一年（一九四六）には、会所の掃除を行って清払を行っている様子が会計帳簿からわかる。この時には、御神饌として鮮魚と野菜などを供えている。加えて、囃子方への謝礼金が計上されていることから、囃子も奉納したと思われる。このように、函谷鉾町でも戦前戦後に途切れることなく神事を守り続けているのである。今回調査している史料に残る帳簿類からは、史料の乏しい時期の祇園祭の様子もある程度復元することが可能である。

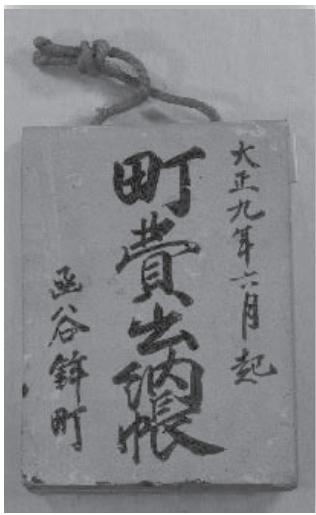
## 近世の町組関係

そのほかに、近世の町組関係史料も多数残されている。これらは写しではあるものの、いろは順に番号が割り振られており、意図的に残されたものと考えられる。内容は、函谷鉾町が所属した町組以外の町組のものが多くなっている。中には大坂三郷に関わるものもあり、分析を進めることで当時の町の問題意識を垣間見ることができると思われる。

## 近代の町関係

近代の町関係文書も非常に興味深い。残っているものは、主に明治二十年代（一八八七〜九六）以降の土地・借用銀・講関係、大正・昭和期の町費関係、大正期の「函友会」関係文書である。これらの史料からは、近代における町住民の受益と負担の関係や相互扶助の実態、学区・行政と町の関係を読み取れる可能性がある。

さらに、「函友会」関係の史料を分析することによって、大正デモクラシー期に伝統的な町運営が刷新されていく様子や、山鉾町における町同士の関係も伺い知れる可能性がある。今回発見された函友会の規約によれば、函友会は函谷鉾町内の居住者によって構成され、「町内居住者ノ親密ヲ計ル」ことを目的とした、大正九年（一九二〇）一月に結成された組織である。そして、町内住民の間に区別のない「自由平等」を旨としている。活動としては、毎年春と秋に懇親会を開くこと、神事の際に初穂料を納めることが明記されている。これは、近世以来の家持を中心とした町運営に対して、借家人を含めた住民全体の懇親と町運営を強く意識しているという点で画期的な内容とみることができ。



実は、このような家持と借家人の区別をなくして、「自由平等」を意識

した町運営を行った事例として、大正八年（一九一九）七月の六角町の事例が存在する。この町では、半数以上の住民が借家人の町運営に関する家持と対等な権利を求めて、祇園祭の時期に町を脱退

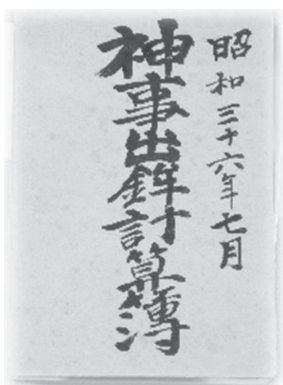
する意志を示すという紛擾が起き、祇園祭の遂行に支障を来す恐れが発生した。そこで、町は急遽借家人を意志決定権者に含めた運営体制を作り上げ、「時代思潮」に沿った「平等」で民主的な組織へと転換した。このような町の対応により、紛擾はわずか二週間で決着している。この紛擾の際にも、「自由平等」という言葉が用いられている。函谷鉾町の函友会はこの紛擾の翌年一月に結成されており、関連が予想される（奥田、二〇一〇a・二〇一〇b）。

## 近代の学区関係

学区関係の史料が豊富に含まれている点も特徴である。特に昭和戦時下における史料が豊富で、防空演習や軍人会関係の史料からは、町や学区を通じて人々が戦争と関わっていく様子を垣間見られる可能性がある。また、学区を通じた町同士の繋がりがや行政―学区―町の関係が伺える運動会・青年会関係の史料も残っている。加えて、行政による布達が多く残されており、資料館等に収蔵されていないものも含まれている可能性がある。

## 戦後〜高度経済成長期

戦後の史料では、昭和三十年代（一九五五〜六四）の雛子方の出席簿、鉾運営の経費・連絡事項に関する史料が残っており、戦後の祇園祭の様子を概ね再現できるのではないかと考える。



## その他

その他に、革箱入りの「板倉二十一箇条」、頼母子講関係の史料のほか、講で用いられた籤、鍵といった物品も多数残っている。

以上のように、函谷鉾保存会保有文書は、近世から近現代にかけての祇園祭運営と、それを支える町運営の実態がかなり詳細に明らかにできる史料と言いうことが出来る。さらに、町―学区―行政の関係性を示す史料も多く、一町に限らない、より広範な問題を明らかにできる可能性がある。定期的にも近世から近現代まで含み、超長期的な分析が可能となる重要な史料群ということができる。

## 〔引用・参考文献〕

奥田以在「近代京都山鉾町における紛擾と自治」『社会経済史学』第七六卷第一号  
二〇一〇 a

奥田以在「近代京都山鉾町における町自治―住民自治から『適任者』自治へ―」『経済学論叢』（同志社大学経済学会）第六二卷第三号 二〇一〇 b

奥田以在「戦中・戦後の祇園祭と町衆―昭和一八年（一九四三）―昭和二五年（一九五〇）の六角町・北観音山を事例に―」『経済学論叢』（同志社大学経済学会）第七一巻第四号、二〇二〇

祇園祭編纂委員会・祇園祭山鉾連合会『祇園祭』筑摩書房 一九七六

財団法人函谷鉾保存会『函谷鉾町百年史―明治大正そして昭和―』財団法人函谷鉾保存会 二〇〇一

# 白楽天町文書の調査活動から

橋本 章

## 1. 白楽天町文書の概要

白楽天山は、唐の詩人白楽天が道林禪師に仏法の大意を問う場面をあらわした御神体人形を有する山である。高名な詩人と禪師との問答の様子は、深い洞察と経験に裏打ちされた人の素晴らしさを感じさせ、見る者に学問を志す心持ちを誘う。

白楽天山を飾る装飾品には、十六世紀に作られたゴブラン織の「トロイヤから脱出するアイネリアス」を中央にして、左右には波濤飛龍文刺繍裂を継ぎ合わせた前懸をはじめ、孔雀や麒麟などの聖獣を金糸で刺繍した水引、そして見送には山鹿清華作の「北京万寿山図」の綴織が用いられている。また胴懸には、左に昭和五十三年（一九七八）にフランスから輸入した十七世紀のフランドル地方製のゴブラン織「農民の食事」を、右には十八世紀ベルギー製のタペストリー「女狩人」が用いられるなど、新しさと伝統が融合した美しい姿が山鉾巡行を彩る。

この白楽天山を伝承する公益財団法人白楽天山保存会には、江戸時代のものを中心に数多くの古文書が保管されている。白楽天町文書に関しては、すでに京都市によって調査が行われており、目録の作成と一部史料の撮影がなされている。『史料 京都の歴史』の第一二巻「下京区」には付録として「下京区関係文書目録」が掲載されているが、そこに列記された白楽天町文書は六〇点で、うち明治以降の近代資料が九点、年未詳の資料が八点、江戸時代から近代までの記録が綴られている資料が五点あり、それ以外

は全て近世期の資料となっている。白楽天町文書の主なものについて紹介しよう。

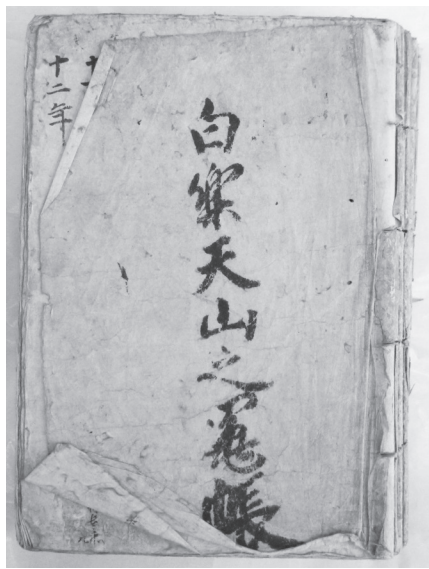
「白楽天山之鬮帳」慶長七年（一六〇二）～明治二十八年（一八九五）

白楽天山に伝わる祇園祭の記録。慶長七年から記載が始まり、明治二十八年まで書き継がれている。白楽天町が所蔵する資料群の中でも最古の記事をもつ資料とされる。表題を『祇園会白楽天山鬮取進退之覚』とも記され、白楽天山のくじ取りの結果や、その年の頭人や行事などの各役職者の名前、そして巡行を見物した貴人の名前と見物場所などが記されている。また山の懸装品の変遷についての詳細な記述もあり、白楽天山はもとより祇園祭の近世期の変化を知る上で貴重な資料となっている。（写真1）

「祇園会行事次第」元禄十五年（一七〇二）～昭和四十四年（一九六九）

白楽天山に伝わる祇園祭の記録で、元禄十五年から昭和四十四年まで書き継がれたもの。その年の巡行の鬮順や当番役の名前のほか、特別な事象があつた場合はその次第が記載されている。

例えば明治四十四年には、市電開通に伴い当時の知事から巡行の中止を求められたのに対し、山鉾町側が抗議して、結局例年通り祭礼を執行する事で決着し



【写真1】「白楽天山之鬮帳」表紙

た事などが書き連ねられているなど、明治維新以後の祇園祭の変化について詳細な記載がある。

「山鎊道具帳」 宝永五年（一七〇八）～明治二十八年（一八九五）

白楽天山の装飾に関わる道具類の記録帳。毎年の頭人と行事の氏名が記されているほか、人形飾りや懸装品など、白楽天山を彩る品々が書き上げられており、それらの道具の普段の保管先の当主の名前などが記されている。かつて山の道具を収納する町家の蔵が整わなかった時代には、白楽天山の道具は町内の各家の蔵に分散して保管されていた事が知れる。

「御山寄進控 新出来物控」 明和元年（一七六四）～安政四年（一八五七）

白楽天山の装飾品や祭祀に係る諸道具の寄進ならびに新調に関する記録簿。新たに白楽天山に品物が整えられた際にはその品名や員数と費用、あつらえられた年月日、また寄進者がある場合はその氏名などが記載されている。殊に寛政から文化年間頃の白楽天山の懸装品が盛んに新調されている様子が詳述されており興味深い。帳面の表紙には明和元年からとなっているが、書き出しには宝暦二年（一七五二）の記録も残されている。

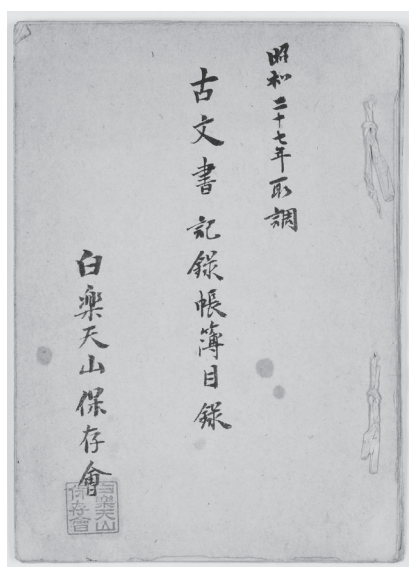
2. 白楽天山町文書「古文書記録帳簿目録」について

さて今回の山鉾行事歴史資料調査では、白楽天山町文書については令和三年（二〇二二）二月十二日に予備調査を行い、全体像を把握した上で令和四年（二〇二二）一月二十五日から史料の撮影作業を開始した。そして今回の調査では、近代資料を中心に次の五点の撮影を実施した。

- ① 明治十六年一月 議定連印証 白楽天山町中
- ② 大正十二年七月備之 山又ハ鉾補助金願書写 白楽天山町
- ③ 昭和二十七年草稿 御山行事次第心得 御山道具目録仮書 御山寸法重量控 白楽天山保存会
- ④ 昭和二十七年取調 古文書記録帳簿目録 白楽天山保存会（印）
- ⑤ 祇園会の濫觴の写 原本（巻物）は八坂神社に奉納

このうち、④の「古文書記録帳簿目録」は京都市によっても調査されているが、それ以外は今回初めて撮影を実施したものである。この「古文書記録帳簿目録」は、白楽天山保存会が所有する文献資料について昭和二十七年（一九五二）の段階で調べられ目録化されたもので、そこには一八七点もの資料が列挙されており、白楽天山保存会に伝わる資料群がかなりの物量である事がうかがい知れる。（写真2）

この「古文書記録帳簿目録」の特徴は、それぞれの文書について通し番号が振られ、表題のほかに著された年月日とその内容の概略が添書されている点にある。第二次世界大戦の終戦直後の時期に、恐らく町内の人びと



【写真2】「古文書記録帳簿目録」表紙

の手によって保存文書の点検が行われ、その内容がある程度把握されていったことの意味は大きいものと思われる。その様相の一部を以下に冒頭から書き起こす。

〔表紙〕

〔昭和二十七年取調

古文書記録帳簿目録

白楽天山保存會（印）

古文書記録帳簿目録

第壹號 白楽天山之鬮帳 慶長壬寅七年

祇園會白楽天山鬮取進退之覽 古屋蘇菴撰

此帳簿古文書中最モ古キモノナリ明治五年壬申六月迄記載アリ

御山懸装ノ変遷毎年ノ巡行ノ模様等詳記アリ

第貳號 祇園祭會行事次第 元禄拾五年壬午六月吉旦

年寄 宗專／善齋 序文

此帳簿元禄十五年ヨリ現今ニ至ル迄毎年ノ鬮順ヲ記シアリ

明治以後ハ祇園祭ノ消長ヲ詳記アリ

第參號 山飭道具帳 寛永戊子五年六月吉日

此帳簿宝永五年及享保二十年ノ道具帳ナリ 宝永六年ヨリ明治二十八年

マデノ毎年頭人行事ノ氏名ヲ記シアリ 天明二年ヨリ同八年マデ町内事

情詳記アリ

第四號 祇園御山當屋行事勘様覚 延享元甲子歳六月吉日

附山町當番之控 寛政十年戊午五月 追補記

此冊子祇園祭ノ次第ヲ知ル最モ古キ記録ナリ

第五號 御山寄進控／新出来物控 明和元年甲申六月

此帳簿表題ノ内容極メテ詳述セラレアリ殊ニ寛政文化ノ頃御山懸装ノ新

調盛ンニ行ハレシヲ知ルニ足ルモノナリ年代ハ宝曆二年ヨリ安政四年及

ブ

第六號（無題）

此冊子山當番町ノ内規ヲ記セルモノニシテ山町ノ集会ノ當番ヲ定メ明和

六年ヨリ同八年三月二十八日迄記シアリ

第七號 安永七戌六月控

此帳簿天明大火以前ノ唯一ノ道具帳ニシテ寛政復興ノ際照合ニ用ヒタル

モノト思ハレ天明大火ノ罹災状況ヲ知ルコトヲ得ルモノナリ

第八號 御請書 一葉 天明六年午六月四日

鉾町山町代表町長刀鉾町蠅螂山町孟宗山町橋弁慶山町ヨリ御奉行様トシ

テ差出シタル書状ノ寫ナリ

第九號 覚 一葉 明和七年寅五月二十八日

壺屋源右衛門ヨリ花色古渡朝鮮錦ヲ買受ケタル際ノ売渡証書ナリ

第拾號 祇園神輿願兒願供願書写

壬生村ヨリ助合入候ニ付請負方ヨリ一札之写



口上書等ノ寫七葉綴合セタルモノニシテ寛政元年五月ヨリ天保七年五月  
二頁ル

第拾八號 雙林寺閑阿弥ニテ門内参会控

文化元年十一月二十九日

第拾壹號 新調出来物控帳并ニ諸払渡シ控 寛政六甲寅五月

第拾九號 道普請講石積直シ入用算用并ニ割合集払出控帳

文化貳年丑五月

寛政六年ニ於ル表題ノモノナリ

第拾貳號 神用諸色録 寛政九丁巳年六月吉日改正

第貳拾號 山由来御尋ニ付返答書写 当番孟宗山町へ出ス

文化九年申六月五日

寛政復興後改正セラレタル道具帳ナリ

第拾參號 祇園御神輿修復寄附覚 寛政九年丁巳八月

第貳拾壹號 江戸御拝礼下リ番相勤諸式勘定控

文化九年壬申□月吉日

當町年寄先役五人組ヨリ祇園御社中ニ差出セル写ナリ

第拾四號 御神事當家行事勤方 庚申六月

寛政十二年ニ記サレタルモノニシテ文化元年文化三年追補セラレアリ

第貳拾貳號 江戸表御拝礼相勤帰京ニ付右祝詞園山源阿弥ニテ相催勘定諸

式控

文化十年酉正月二十一日

第拾五號 御神事行事勤方

記サレタル年代ハ不祥ナルモ寛政十一年以後文化初年迄ノ間ノモノト思  
ハル

第貳拾參號 年頭御拝礼取拵一件(木箱入) 文化十年酉十月

右三冊文化十年正月江戸へ出府ノ節ノ記録ナリ

第拾六號 寄進勸化之控并遺物 寛政九歲巳八月

寛政九年ヨリ文化五年ニ至ル間ノ諸国諸社寺へノ奉納金ノ控帳ナリ

第貳拾四號 祇園社御修復轅拾町勘定帳 巳卯文政貳年三月吉日

第拾七號 門普請勘定帳 享和二年戊三月

第貳拾五號 祇園社御修復諸払方日記帳写 文政貳年巳卯三月吉日

享和二年ヨリ文化五年ニ至ル間ノモノナリ

第貳拾六號 祇園社御修履金銀控大帳写 文政貳年己卯三月より

右三冊同年祇園社修履二関スルモノナリ

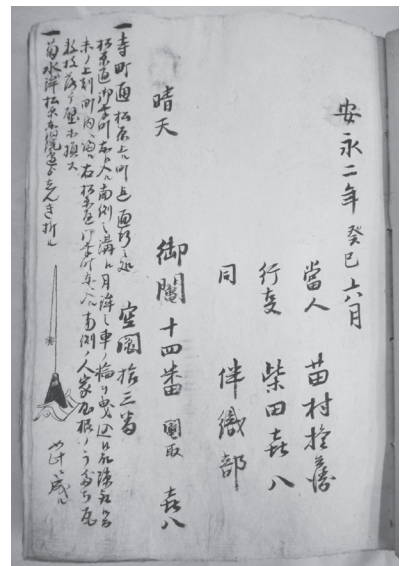
(以下略)

### 3. 『近世祇園祭山鉾巡行史』への白楽天町文書の引用

白楽天町文書が整理されて、ここで紹介した「古文書記録帳簿目録」にまとめられた意味は決して小さくはない。特に本論の冒頭で紹介した「白楽天山之鬮帳」や「祇園祭會行事次第」、「山飭道具帳」、そして「御山寄進控 新出来物控」といった資料は多年にわたる祇園祭の記録資料であり、白楽天山はもとより祇園祭全体に関わる記述が見られる貴重なものである。

例えば、昭和四十三年（一九六八）に祇園祭山鉾連合会によって刊行された『近世祇園祭山鉾巡行史』には、白楽天町文書が元になったと考えられる記述がいくつも見られる。当時の連合会理事長田中常雄氏による同書の緒言には、この本について「ここに当連合会元理事福井秀一氏に囑して成稿し、これが刊行を実現するはこびに立至ったことは、何よりも喜ばしいことと思うのである」との一文がみえる。この福井秀一氏は白楽天山保存会の一員であり、白楽天町文書を熟読することが可能であった人物でもあったと考えられる。その後『近世祇園祭山鉾巡行史』は推敲が加えられ、昭和四十九年（一九七四）には改訂版が刊行されているが、その編集作業にも福井秀一氏は携わっている。

『近世祇園祭山鉾巡行史』に白楽天町文書が引用された痕跡としては、例えば同書の「六、巡行中等の鉾の事故」（『改訂版』五五頁から五七頁）において、鉾の真木が折れている挿絵が六点掲載され、それぞれの詳細が



【写真3】「白楽天山之鬮帳」より  
「安永二年六月 菊水鉾志んき折ル」  
記述箇所

れと全く同じ挿絵が掲載されており、同書の執筆者が「白楽天山之鬮帳」から転載した事は明らかであろう。ほかにも『近世祇園祭山鉾巡行史』には典拠が明白ではない史料が散見されるのだが、白楽天町文書の諸資料と照合してゆけば、ある程度の合致を見ることができるとはいえないかと推察される。（写真3）

祇園祭山鉾巡行の歴史に関する研究については、草創期から成立期となる中世の状況についての興味関心が高く、それについての史料的研究も数多くなされてきた。しかし山鉾巡行の成熟期といえる近世の様相を記した史料や、変転を迎える近代の史料の検討については、中世期ほどの熱量を持って取り組まれてこなかったのではないかと印象を持つ。その意味で、近世の様相を史料的に追った本書『近世祇園祭山鉾巡行史』が担ってきた意味は大きかったものと思われる。昭和二十七年に白楽天山保存会の人びとが保存する文献史料の価値を再認識し、それを「古文書記録帳簿目録」にまとめていた事は、後世に少なからず影響を与えてきたのである。

記されている点などにあられてい  
る。同書にはこの  
記事や挿絵の出典  
は明記されていな  
いのだが、白楽天  
町文書の「白楽天  
山之鬮帳」にはこ